

風土と宗教(2) 和辻哲郎『風土』を手引きとして

著者	荒井 優
雑誌名	鳥取短期大学研究紀要
号	47
ページ	1-10
発行年	2003-06-01
出版者	鳥取短期大学
ISSN	1346-3365
URL	http://doi.org/10.24793/00000258

風土と宗教(2) —和辻哲郎『風土』を手引きとして—

荒 井 優

Masaru ARAI : Climate and Religion (2)

— Referring to *The Climate* by Tetsuro Watsuji —

近年、グローバル化や環境問題への関心と相まって、日本の多神教的風土への関心とその見直しが盛んに提唱されている。筆者も、哲学とくに宗教哲学の立場から、そうした動きに関心をもって、風土論の古典的名著である和辻哲郎『風土』が着想したいくつかの概念を手引きとしながら、日本の多神教の（キリスト教的フィルターを介さない）見直しと日本文化の再理解・再構築に努めたい。

本稿は「風土と宗教(1)」(研究紀要第45号所収)の続編であり、日本文化の特性を和辻の「家」(うち)という概念を手引きとして解き明かそうとしている。

キーワード：東洋と西洋 家 「うち」と「そと」 感情的共同体 自然観

6. 日本文化の特性

(1) 日本の珍しさ

和辻哲郎が1年半のヨーロッパ留学を終えて帰国したとき、改めて見出した近代日本の文化的特性を彼は「珍しさ¹⁾」という言葉で表している。彼はヨーロッパの美しい牧場の自然に感動したが、それを珍しいとは感じなかった。むしろ渡欧の途中で目の当たりにしたアラビアやエジプトの砂漠の方が、日本人の彼にとって遙かに珍しかった。しかし「旅行をおえて、日本へ帰って見ると、この日本というものがアラビアの砂漠にも劣らぬほど珍しい、全く世界的に珍しいものであること²⁾」を痛切に感じたという。

和辻がここで「珍しい」と言っているのは、「近代日本の珍しさ」である。明治時代以降、日本は衣食住にわたって積極的に西洋化を推進してきた。都

会には洋風の建物が立ち、舗装された道路には自動車走っている。古い町並みのあいだを電車が走るようになった。人々は洋服を着て、靴を履いている。見るかぎり、日本はすっかり西洋化されてしまった。日本の古い町並みや伝統は消えつつあるかに見える。その西洋化された日本は、しかし根っこのところで西洋ではなかった。この齟齬に見え隠れするアンバランスな側面を、和辻は「珍しさ」と表現したのである。

近代日本は西洋を模倣したけれども、その根本的基底のところに純日本的あるいは原日本的なものが依然として存続していることに、和辻は気がついた。それは和辻にとって衝撃的な発見であったろう。彼は次のように述べている。「その中に住んで見慣れていたその通例の有り方がそのままであるとともに、その底にこれまで理解せられていなかった一層根本的な有り方が呈露され³⁾」、それが自分のなかで日本文化の「珍しさ」としてつかまれたのであ

ろう、と。

西洋的なものを取り入れる、その取り入れ方に、実は日本文化の特性があるというのである。それは——和辻哲郎はこのような捉え方をしていないけれども——日本人の「原始的心性⁴⁾」(Primitive Mentality) (レヴィ=ブリュール) と言えるような根源的な特性ではないかと、私は考えている。あるいは、ユングの深層心理学の概念を用いれば、日本人に共通する「集合的無意識⁵⁾」(Kollektives Unbewusste) と言ってよいものではないだろうか。

ひとつ例をあげてみよう。和辻が端的な例としてあげているのが、「靴」である⁶⁾。私たち日本人は靴を履いて家を出る。そして家に帰ると靴を脱いで玄関をあがる。これに対して欧米人は家の中に入っても靴を脱がない。寝室のベッドに入るときに初めて靴を脱ぐ。それは欧米人だけではない。中国でも、家の中では靴を履いたまま生活する。しかし日本では、家の中では「靴を脱ぐ」のが無意識の習性である。家に帰れば靴を脱ぎ、上着を脱ぎ、ズボンを脱ぐ。家の中であれば、下着一枚でうろつこうが、それどころか真っ裸でうろろしょうが、だれも咎めはしない。自宅はどんな格好をしても許される気楽な場所である。それは「靴を脱ぐ」という行為から生み出される心理的な所産である。

しかし欧米では、こうした気楽さは望めない。日本人が海外旅行をして一番困るのは靴を脱げないことであろう。筆者はヨーロッパのあるホテルへ泊まり、部屋に入ってすぐに靴を脱いだ。ところが、日本のホテルならあたりまえに備わっているはずのスリッパが部屋には見あたらず、ひどく戸惑った経験がある。

さて文化論的にみて、靴を「脱ぐ」—「はく」というこの何げない動作(「習性」といってもよい)の根底には、いったい何が隠されているのであろうか?

私たち日本人であれば、だれもが認めるであろう。その動作は「うち」—「そと」という観念に対応している。妻は夫を「うちの人」といい、夫は妻

を「家内」という。家族は「身内」といわれる。家族でなくとも、飼われている犬もまた「うちの犬」といわれる。日本人にとって、この「うち」とは端的に「家」のことである。私たちは「うち」では靴を脱がなければならない。子どもの頃、急いでトイレに駆け込むために、思わず「土足であがり」、親にたしなめられた苦い経験は、私だけではなかったはずである。

(2) 家と風土

「家」とは家族がくつろぎ寝起きする場所をさすと同時に、またそこに住まう家族の共同体をさす言葉である。一見して、家が日本だけに固有のものではないことは明らかである。人が住むかぎり、世界のどの地域にも家はある。文明社会にも、未開社会にも家は存在する。しかし、「家」のあり方は世界共通ではない。堅固な扉と鍵によって防備された家、植え込みの垣根によって囲まれた家、障子と襖によって仕切られた部屋。家のあり方は風土によって異なる。

このことを最初に指摘したのは、おそらく和辻であろう。「我々は〈家〉にもとづく多くの〈珍しい〉現象を数え上げることができるであろう。⁷⁾」彼は著作『風土』のなかで日本文化の特性をもっぱら「家」という観点から捉えようとしている。

和辻によれば、「家」つまり家族的共同体は、牧場的風土、砂漠的風土、モンスーンの風土によって明白に相違しているという⁸⁾。

ヨーロッパの牧場的文化の始まりはギリシアである。ポリス形成期、戦士である男たちは故郷の牧場を離れて、地中海沿岸の諸地方を征服し、征服した土地の女を奪って妻とした。ギリシアの文物にみられる夫殺しや女性蔑視は、このような史的背景にもとづいていたのであろう。ペリクレス時代においても、女性の地位はほとんど奴隸的であった。「アテネでは、女性は部屋に閉じこめられ、法律によって嚴重に拘束され、特別の役人によって監視されている。……ギリシアの女性は半奴隸状態を強制されて

いたのだ。それを憤る自由すらもっていない。アスパシアやサッフォーがほそほそといくらかの抗議をきかす程度である。⁹⁾」(ボーヴォワール『第二の性』)当然のことながら、家族は「ポリス」に対してはるかに軽んじられていた。中世から近代にかけてヨーロッパの街作りや共同体形成が、ギリシアのポリスを範としたことは言うまでもない。日本では自分の家を私有物として占有するのとは対照的に、欧米では家もまた街のなかの公共物と考えられている。ここに、ギリシア的＝ポリス的な社会意識があらわれている、と言いうるのではないだろうか。

砂漠的風土においても、共同体の単位は「部族」であって「家族」ではない。わずかな泉と草を求めて寄留する遊牧生活の下では、家族でさえも共同体から離れては生き延びことはできなかったであろう。砂漠に生きる遊牧民は、自然に対してのみならず他の部族に対しても、対抗しなくてはならない。そのような戦闘的集団として、砂漠的共同体は宿命的に「部族」単位で動かざるをえなかったのである。

「家族的な生活の共同に最も重心を置いたのは、モンスーン的な家族である。¹⁰⁾」モンスーンの自然の恵みと自然の暴威のもとで農業生産に従事する単位は家族であろう。その決定的な要因は、水田耕作だった¹¹⁾。土地を耕して水平にし、田へ水をひく灌漑設備を作るために「村」が生まれた。その水田に苗を植え、雑草を取る。稲を守り育て、穂を実らせ収穫するには、「家族」の共同作業が不可欠であった。ギリシアの神々の生活がポリス的なものとは対照的に、日本の神々の生活が村落的・家族的な性格をおびているのはこのためである。

(3) 日本の「家」

ところで日本の「家」がもっている特性は、いったいどこにあるのであろうか。「うちでは靴を脱ぐ」という行為の背後に、日本人のどのような集合的無意識(和辻はこれを「間柄」と言う)があるのであろうか。私たちはまず和辻の分析にそって解き明かしてゆこう。そこから家をめぐる、あるいは

家に派生するさまざまな文化現象もまた説明できるはずである。

日本の「家」つまり「うち」に秘められた本質構造を解き明かすために、和辻はまず建物としての家の構造に着目する。なぜなら「人間の間柄としての家の構造はそのまま家屋としての家の構造に反映している¹²⁾」はずだからである。日本の伝統的な家屋に目を転じてみると、私たちは日本の住居のきわだった特徴を見ることができる。

日本の家の内部は、どの部屋も「襖と障子で仕切られている¹³⁾」。建築の面でいえば、日本は「襖」と「障子」の文化である。それは物理的にはひ弱な障壁である。押し入ろうとすれば、容易に押し入ることができる障壁である。しかし私たちは、それが容易には押し入ることのできない心理的な障壁になっていることを知っている。それは家族相互の信頼によって成り立つ「心の障壁」なのである。そして私たちは、障子や襖を通してみれる、家族のちょっとした気配を察してふるまう。和辻はこの日本的な障壁を「距てなき結合における仕切り¹⁴⁾」と言っている。「家」は「距てなき結合(共同体¹⁵⁾)」であり、家族は「距てなき間柄¹⁶⁾」である。その理想は一心同体をめざす。この「距てなき結合」としての「家」が隠喩的に「うち」といわれる。

こうして共同体的「家」の「そと」へ出るとき靴をはき、「そと」から帰れば玄関で靴をぬぐ。私たちはそうすることによって、その都度、自分の属する共同体の内と外を峻別し、自分の居場所を再確認して安堵する。和辻はそこまで言うてはいないけれども、日本では「うち」の意識を通して「私」は「家」と一体化し、「うち」を通して家族と心をつにしていると言えないだろうか。「家」には私の(あるいは妻の、そして子の)心と歴史が反映され蓄積されている。だから「間柄」としての私にとって、「家」そのものが私となり、私の妻となる。私も、妻も、子どもも、ひとしく「間柄」として「家」に収斂される。「うちの人」、「家内」、「うちの子」(——このような人間観が、西洋哲学とくに実存主義哲学の人

間観から逸脱していることは重々承知している。これは蛇足であるが、西洋哲学は普遍主義を標榜するが、その普遍主義も結局はヨーロッパ的風土によるローカルなものだと、最近私は思っている——)。私が勤めを終えて「家」に帰るとき、私は妻のもとに帰るのである。

そしてもう一言いわせてもらおう。「ふるさととは遠きにありて思うもの」(室生犀星)と詠われる「ふるさと」とは、私が生まれ育った土地のことではなく、私が生まれ育ちそしてそこを出た「家」のことをいうのではないかと私は思う。あるいはまた、日本人は毎年正月と盆になると「家」に帰る。それは、民俗学的には、祖霊信仰にもとづく年中行事の一つであると説明される。しかし祖霊信仰をもたずとも、私たち日本人はやはり「家」に帰るであろう。

日本とは対照的に、ヨーロッパの家の内部は、どの部屋も厚い壁と扉によって仕切られ、独立した部屋に区切られている。その重い扉は空気までも遮断する。

こうした家の構造は家族の間柄の構造を反映している。ヨーロッパでは、個人の心の内外は部屋の扉の内外となる。一步自室の扉を出れば、きちんと身なりを整えて靴をはく。「うち」—「そと」という日本的な区別をあてはめるなら、自室が「うち」となる。だから家庭の中でも、社会的な義務と責任が求められる。(その意味で逆にいえば、個室のない日本の家は、その全体が一つの個室といえる。そして日本の家では義務よりも愛情(いたわり合い)が優先される。)ヨーロッパでは、自室を出れば、そこはもう自宅の食堂であろうと街のレストランであろうと「そと」となる。それはまた見方を変えれば、街のレストランもオペラ劇場も、家庭内と変わらぬ茶の間や居間の役目をつとめる。家庭内の団欒が街全体に広がってゆく。家庭内を「内」というなら、街の公園も道路も、街の公共施設はすべて「内」である。

それはヨーロッパの独特な街の構造にもとづいている。中世から近世にかけて作られたヨーロッパの

都市は「城塞都市」(Burg)の性格をもっている。他部族・他民族に対して、そして周囲の鬱蒼とした森林に対して、街全体を強固な城壁で囲み防衛した。街の城壁や濠に囲まれた内側は、共同生活をともに営むテリトリーという意味では「内」である。ヨーロッパとくにドイツの地方の街は、いまでもこのような防衛的たたずまいを色濃く残している。



図1 ローテンブルクの城壁と城外の森

和辻はこうした西洋の街(共同体)を「距てにおける共同¹⁷⁾」という言葉で特徴づけている。「だから部屋と城壁との中間に存する家はさほど重大な意味を持たない。人はきわめて個人主義的であり、従って距てがあるとともに、またきわめて社交的であり、従って距てにおける共同に慣れている。すなわちまさしく〈家〉に規定せられるということがないのである¹⁸⁾。」

明治時代以降、日本は西洋化の道を進んだ。第二次世界大戦後、その西洋化は加速した。私たちは洋服を着て、西洋風のマンションに住むことを好んでいる。しかしそれにもかかわらず、旧くからあった日本人の心性は変わらぬままである。建物は洋風になっても、日本の「家」は根本において少しも西洋化されていないのである。

(4) 「うち」と非公共性

このような日本の「家」の特異性から諸々の特異な文化現象が派生してくることは、容易に推測する

ことができる。その例をいくつかあげてみよう。

日本人は公共性の意識に乏しい、とよく言われる。たしかに日本人は公共の問題に対して、自分の問題のように関心を示さない。

ささいなことだが、家庭内に植えられた花壇の花のことをとりあげてみよう。筆者がドイツのローテンブルクを散策していたとき、ひときわ美しい家の庭先に作られたこれまた美しい花壇が私の目にとまった。よく見ると、それらの花々はみな庭外の道に向かって咲いていた。一部は垣根の外側にもおかれていて、やはりその花々は道ゆく人のために向けられていた。

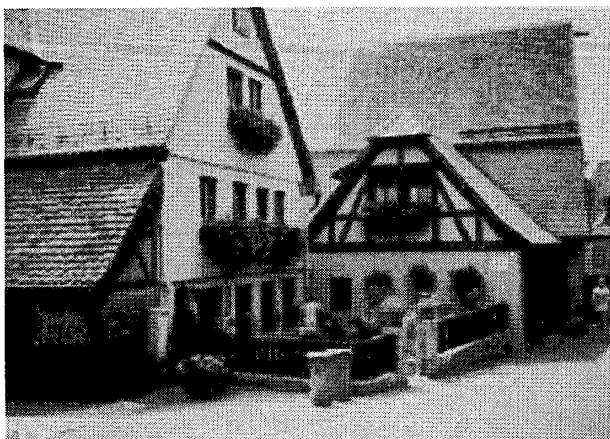


図2 民家の花壇（ローテンブルク）

日本なら、庭先の花々はそこに住む家族が楽しむために植えられる。窓辺に花をおくとしたら、私たち日本人は窓の室内側に花を飾るであろう。しかし、ドイツだけではなくイギリスでもフランスでも、窓辺の花は窓ガラスの外側に道路に向かって飾られていた。その習慣の発端は汚物を道路に捨てていたための臭い消しであったろう。しかし下水道が整備された現代においても、やはり花々は外に向かっていて。

日本の家は内向きで「閉じている」。西洋の家は外（公共）に向かって「開いている」。家を囲う垣根は、日本では「うち」と「そと」を距てる境界であるが、西洋の人たちにとっては決してそういうものではないことを私はつくづく知った——とはい

え、西洋の「公共性」（和辻のいう「距てにおける共同」）という心理は、相変わらず私には実感できないでいるが——。

私たち日本人は今日たとえ洋館に住んでも、街の問題や国の問題を自分の問題として捉えようとはしない。それは「家」の外の事柄だからである。政治家の不正に対してどれほど怒ろうとも、その怒りは家庭内の問題とは全く別次元のものである。外でどのような犯罪が行われようと、首相が誰に代わりようと、自分の家を脅かさなにかぎり、自分で痛みを感じる問題ではないのである。

(5) 「うち」と以心伝心

日本にきた外国人が最初に嘆くことは、「ガイジン」と呼ばれることだ。私のもとに来る留学生たちも、来日早々この言葉を投げかけられて傷つく。彼らがどれほどの親日家になろうとも、どれほど日本に長く滞在しようとも、日本人にとって彼らはやはり「よそもの」なのだ。

そこにも「うち」と「そと」の峻別が隠れているようだ。「うち」という言葉に込められた「家」意識は、家族を超えて日本人という民族のレベルにまで拡大される。

和辻によれば、日本の民族性は「家」のアナロジーによって把捉されうるといふ。国家は「家の家」である。家のまわりの垣根は国境にまで拡大される。家においてと同じく、国家の内部においても「距てなき結合」が求められる。「家」において「孝」と呼ばれる徳は、「家の家」では「忠」と呼ばれる。それは宗教的で「教团的な結合」なのだ、と和辻は語っている。日本の民族は「家」にもとづく「一つの教団」なのだ、と¹⁹⁾。

このように国家にまで拡大される「家」の発生源は、先述したように、水稻耕作から由来しているというのが和辻の捉え方である。たしかに「家」を発達させた大きな要因の一つは水稻耕作であろう。しかし、それだけであろうか？ そして、最近のDNA研究によって日本の民族がけっして単一民族

ではなく、中国系・朝鮮系・南方系・北方系・純日本系の混在であることがわかっているが、それにもかかわらず、私たちの心情には「日本人は同一である」という根深い潜在意識があるように思われる。それは民族的共同体というよりも、むしろ文化的共同体というべき性格ではないかと思う。その場合、日本の文化的レベルで「うち」と「そと」を峻別する要因は、心情や感情のレベルでの共同意識ではないかと、私は考えている。

このような共同意識——異邦人を「そと」の人間と感じ、同邦人を「うち」の人間と感ずる私たちの根深い心性——は、風土という観点からして、いったい何に由来しているのでしょうか？

それは日本における人間関係や伝達方法の特殊性にあるのではないだろうか。禅問答に「以心伝心」という言葉がある。真理の伝達は文字や言葉によるのではない。心を以て心に伝える。知識ではなく、心を同じくすることが肝要とされる。日本人の伝達方法はこの「以心伝心」を最大限に活用してきた。説明を聞く前に、相手の言うことを感じとって理解する。そのような伝達が成り立つためには、論理や言葉を駆使する以前の、心情の一致と情緒的な同質性が前提とされる。「和」という言葉に示されるように、日本人は情緒的な一体感を尊び、規則性や合理性や原理的なものを嫌う。

日本人が等しく共有するこの同質性・均質性は、何ゆえに獲得されたのであろうか？ そのように問うと、すぐに気がつくであろう。日本が海に囲まれ大陸から隔絶した島国であるということが、その大きな理由であることは間違いない。

ヨーロッパのように開かれた平原では、異なった民族と民族、異なった文化と文化が行き交い交差する。戦いであれ交易であれ、異文化間でやりとりするコミュニケーションの方法は、理由づけ説得する「論理」の原理である。

これとは対照的に、外から閉ざされた狭い土地に密集して住む人びとは、同じ家に住む家族のように、互いに「感情」の同質性と心の均質性に浸され

る。この感情の同質性が、閉ざされた人びとのコミュニケーションの土壌となる。それは鋭い直感と繊細な感受性を培う。

このような心の均質性が、日本の特異な言語表現と言語文化を生み出したのだと私は考えている。言葉の省略・簡略化と削ぎ落としである。主語や人称代名詞を削ぎ落とし、極端に簡略化して相手に伝達する。文学では短歌や俳句が日本独自の美学として発展したのも、日本人が共有する心の均質性によっていたのであろう。言葉は少ないが、そこに込められた余韻と含蓄は深く豊かである。感情の共同体であればこそ、その微妙で特異なコミュニケーションが効力を発揮するのである。そしてこのコミュニケーションを共有しているか否かに、日本人は「うち」と「そと」の峻別を無意識下で行っているのではないかと思う。

このように考えてみると、西洋的な三段論法の論理は普遍的な素地をもっており、異文化間のコミュニケーションとしては優れた機能を発揮する。しかしそれも、風土によって培われた一つのローカルな文化現象であって、他文化に対して絶対的な優位性を誇るべきものではないであろう。

もちろん日本の感情的共同体にも欠点はある。そもそも日本的なコミュニケーションが他文化に受け入れられないことは、私たち日本人は百も承知している。私たち自身が閉じた特殊性を意識し、異文化との交流から後ずさりする。短歌や俳句を好む外国人がいるとしたら、私たちは彼を賛嘆しつつもいぶかしい眼差しを向けるであろう。外国人を「よそのもの」として距てるとき、その距てによって日本人は自らを「そと」に対して距て、自ら「うち」に引っ込んでしまう。外国人に対する距てと劣等感は、「うち」意識の裏返しなのではあるまいか。

(6) 日本の風呂

日本の感情的な共同体意識の例として、もう一つ、蛇足のようにも思うが、「風呂」の例を挙げてみたい。

日本人の風呂好きに例外はあるまい。モンスーンの湿気をともなう暑さと寒さの環境下で、湯船に首までつかる心地よさは格別である。いかに西洋化されても、日本人は風呂についてだけは欧米のバス・タブを見習うことをしなかった。親子で入った風呂の経験は、子ども時代の懐かしい家族の思い出である。銭湯へ行けば、見知らぬ人同士が、同じ湯に浸り同じ湯を使う。

「風呂」とはなにか？ 長いこと、筆者はこの謎が解けなかった。(折口信夫の「タマ」信仰から説明することはできなかった。) そのヒントは和辻の「感情的共同体」という概念にあった。

ここで注目したいのは、「同じ湯に浸る」という共同性である。欧米のバス・タブは一人分である。トイレ兼用のバス・ルームも一人でいっぱいである。日本の家庭風呂は、家族全員は無理としても、夫婦二人で入るスペースは確保されている。夫婦あるいは親子が同じ湯で身体を洗い、同じ湯に浸る。たとえ、一緒に風呂に入らずとも、湯を通してつながる家族同士の心の共有がそこにはある。

筆者は学生時代にアメリカから来日したある大学教授とその家族のお世話をしたことがある。一家の案内役として、一緒に富士山旅行へ行った折り、とんでもない失敗に出くわした。旅先の旅館で、私は教授の息子と一緒に風呂へ入った。息子は偵察役だった。教授は息子から日本式の入浴法を教わり、夫婦二人で浴室へと入って行った。ほどなく風呂から上がってきた教授は、湯の心地よさと日本人の清潔さについて繰り返し絶賛した。その直後、旅館の女将の慌てふためく叫び声が聞こえた。風呂の湯がすっかり流し捨てられていたのである。私は文化の底深い違いを突きつけられて、青ざめゾッとしたのを覚えている。

欧米人は浴槽のなかで身体を洗う。その湯は一回限りで捨ててしまう。彼が浸ったその湯は彼だけのためにある。しかし日本では、人が浸った同じ湯に、後から入る人も身を浸す。湯はみなが共有する。おそらく、それは単なる湯の共有だけではない

であろう。汗を流す心地よさ、首までどっぷり浸る心地よさ、そうした微妙な感情的心理の共有を行っている。それは、たとえば桜の花が日本全国に一斉に開花したとき、その春の訪れを通して日本人のみなが等しく晴れやかな気分を分け持つのと同じように。

(7) 家の構造と自然観

和辻の『風土』は、日本の家を住居(建築物)としてではなく、共同体としての「うち」の観点から考察していた。「うち」は単なる空間の共有ではない、「間柄」感情の共有という特性をもっていたのである。

ところで日本の家を住居として、建築物として見るとき、その建築の構造から日本のどのような精神構造、文化構造が解き明かされるのであろうか？ こうした考察も、日本文化の特性を知るうえで、無視することのできない重要な部分をしめている。しかし、筆者は建築学についてはずぶの素人である。そして、さらに残念なことに、日本の建築学は工学の分野に位置づけられている。日本建築の哲学的・文化論的な研究は、日本ではほとんど行われてこなかった。

列島改造ブームが冷め始め環境問題が問われ始めた1980年代、建築学者による日本文化論的考察が相次いで現れた。そのなかでも、宮川英二の論考「日本人の精神風土と建築」(『日本人の精神風土』所収²⁰⁾)は、筆者にとって示唆に富んだ論文だった。

宮川論「日本人の精神風土と建築」のなかでも、ここではとくに日本の建築構造にどのような自然観が反映されているのかという点に着目したい。日本人が自然に対してどのように関わろうとしてきたのか、自然との折り合いを住居建築においてどのように構造化してきたのか。宮川論によれば、そうした日本人の自然観は「屋根」と「軒と縁」に如実に表れているという。その指摘は筆者にとって衝撃的だった。

日本をふくむモンスーン地域の風土的特性が高温

多湿であることは、和辻が『風土』のなかで繰り返し強調したことである。自然は「恵み」と考えられており、そこに住む人間は自然の中で生きようと、自然に敵対したり対抗したりしようとはしない。砂漠の人間は「自然への対抗・敵対」、牧場（ヨーロッパ）の人間は「自然への支配・人工化」、モンスーン（アジア）の人間は「自然との調和」によって性格づけられる。こうした自然への関わり方は、当然のことながら住居の構造にも反映している。

ヨーロッパの街を歩きながら周辺の建物を見まわすとき、すぐに目にとまるのは建物の壁と窓であろう。ヨーロッパの建物は分厚い石壁や煉瓦壁によって仕切られ、外界とのつながりを断ち切って、住人だけの居住空間を造ろうとする。壁は美しいパステルカラーで彩色され、あるいは絵画や彫刻が施されている。西洋の建築は人工的な「壁の建築」である。



図3 デインケルスビュールの家壁（ドイツ）

それは自然界に対抗し自然界から独立しようとする「城壁」の思想であろう。（不思議なことに、道を歩いて見えるのは「壁」であって、「屋根」が見えてこない。教会や大聖堂の尖塔的な屋根を除けば、ヨーロッパの家の屋根についての印象が筆者にはうすい。）

西洋とは対照的に、東洋とくに中国・朝鮮半島・日本の建物の前に立ったとき、まず最初に目につくのは屋根である。モンスーン特有の降雨量の多さ

（日本の年間降雨量はヨーロッパの3倍を越える）を考えれば、当然のことであろう。東洋の建築は「屋根の建築」である。その作り方は、まず柱を立て、屋根を載せて、それから壁や窓を造ってゆく。

ここで宮川論が着目するのは、屋根の勾配である。「一般に屋根の傾斜が急であれば、建物の独立性、垂直性、威厳性をたかめ、ゆるやかであれば、環境とのつながり、水平性、軽快さを感じさせる²¹⁾。」そう言われてみれば、ヨーロッパの建物は、教会も民家も、みな屋根の傾斜が急でそそり立っている。それは外界に対する独立性の反映である。東洋の建物はそれほど急勾配ではないが、それでも地域差は現れている。中国建築の屋根は隅が大きく反り上がっている。日本建築の屋根は一般に反り上がりを嫌い、勾配もゆるやかである。ただし時代によって、屋根の勾配は違ってくる。大陸文化が輸入された時代（飛鳥、鎌倉）、その当初に建てられた建物（法隆寺金堂、円覚寺舍利殿）は、いずれも屋根の勾配が急で棟の高さも著しく高い。その大陸文化が日本に定着するにしたがって、建物の屋根の勾配はゆるやかに安定してくる。

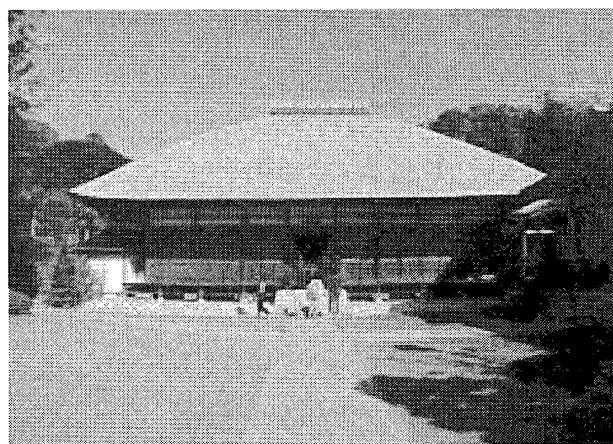


図4 鎌倉・浄妙寺（Iza! Kamakura HPより）

このように日本建築は、輪郭が横長で、独立性を和らげ、周りの自然環境とのつながりを保っているのが特徴である。

日本建築がもつ自然とのつながりは、屋根のすそに突きでた「軒」の出方にも現れている。

ヨーロッパの建物は一般に軒がほとんどない。
(筆者がヨーロッパを旅行して、屋根の存在に気づかなかったのはそのためかもしれない。)ヨーロッパでは、雨量の少なさが軒の出を必要としなかったのであろう。降っても絹糸のような雨で、サッと降ってカラッとあがる²²⁾。

これとは対照的に、東アジアの建物は軒が深い。しかも日本の建物の軒の出は、中国のそれに比べてもかなり深い。「建物に水平的な表現を強調するのは深い軒の線である²³⁾。」日本建築は強い垂直性がない代わりに、軒を深くすることで建物の横長の姿をいっそう横長に強調する。

深い軒は建物の外壁に激しい雨と直射日光があたるのを防いでくれる。モンスーン地域では、軒の出は生活の知恵である。とくに日本の建物は深い軒が不可欠である。しかし日本の軒には、それ以外にも、建物自身の独立性を弱め、自然とのつながりをいっそう強くしようとする協調的心性が秘められていたのである。

ところで日本の軒にはもう一つ別の役目がある。軒の下には「縁」がある。筆者が生まれ育った東京の実家にも縁があった。小春日和の暖かい日射しを浴びながら、筆者はよく軒下の縁側に出てウトウトとまどろんだことがある。時おり、やさしい風が頬を心地よくそよいでゆく。それは自然の外気にふれる魅力的な空間だった。



図5 京都・泉涌寺の縁(京都の日本建築策HPより)

縁は室内からの出っぱりであり、家の延長された空間である。それは座敷と庭をつなげる「つなぎの空間」である。軒は縁という「つなぎの空間」を作り出したのである。「この〈軒と縁で構成された空間〉にこそ日本建築の真髓がある²⁴⁾」と宮川英二は述べている。

「日本の家は屋内と戸外の空間の波動がある²⁵⁾。」ヨーロッパの家は分厚い壁が外と内を区切っている。ところが日本の家は、垣根と門でいちおう外部との遮断はあるが、外部と庭、庭と家とはなんとなく続いていて、明確な境界がない。家空間は座敷から縁側へ、縁側から庭へ、内から外へと拡散してゆく。外の気配は家の中にまで伝わってくる。障子を開けて、風の流れの中に身をおき、花の香りを嗅ぎ、鳥の声を聞く。「日本人の自然との一体感は、戸外の自然の流れの中に自分をおくことでなりたつ²⁶⁾。」窓を通して自然を眺めるのではなく、自分の座っている座敷がそのまま自然の中の一部となることをねがう。

西洋の家は自然を遮断して人間の空間を作ろうとするが、日本の家は自然と直接つながる自然の空間を演出しようとするのである。

そう言えば、私の友人がとても得意げに話していたのを思い出す。彼の家は周囲5キロほどの小さな湖に面していた。ある夏の終わり頃、その地域に激しい台風が通過した。湖水は氾濫し、彼の戸建ての家は床上まで浸水した。そのとき彼は二階にあり、書斎から釣り糸をたらし、しばし釣りを楽しんだという。その話が本当かどうか、筆者は知らない。しかし自然の災禍にあっても、なお自然とのつながりの中に身をおく。それを風流と解する心の共有がたしかに日本人にはある。

注

- 1) 和辻哲郎『風土——人間学的考察——』、岩波書店、初版1935年、改版1963年、156頁以下。
- 2) 『風土』、156頁。
- 3) 『風土』、157頁。

- 4) レヴィ＝ブリュール『未開社会の思惟』(上) (山田吉彦訳), 岩波文庫, 1953年, 5頁以下.
- 5) カール・グスタフ・ユング『自我と無意識の関係』(野田倬), 人文書院, 1982年, 9-27頁.
- 6) 『風土』, 145, 163頁.
- 7) 『風土』, 169頁.
- 8) 『風土』, 141頁.
- 9) ボーヴォワール『第二の性』第2巻(「ボーヴォワール著作集」第7巻) (生島遼一訳), 人文書院, 1966年, 238-9頁.
- 10) 『風土』, 141頁.
- 11) 和辻哲郎『倫理学』下(「和辻哲郎全集」第11巻), 岩波書店, 1962年, 170-171頁.
- 12) 『風土』, 145頁.
- 13) 『風土』, 145頁.
- 14) 『風土』, 145頁.
- 15) 『風土』, 144頁.
- 16) 『風土』, 145頁.
- 17) 『風土』, 146頁.
- 18) 『風土』, 146頁.
- 19) 『風土』, 147-151頁.
- 20) 久野昭・宮川英二・田中日佐夫・平野雅章『日本人の精神風土』, 名著刊行会, 1981年, 39-88

頁.

- 21) 『日本人の精神風土』, 53頁.

- 22) 雨量が少ないから, ヨーロッパの河の水位はほとんど一定している. そのため堤防はないに等しく, 街は河に対して無防備である. 街の傍らを穏やかに静かに流れる河の光景は, 荒々しい河を知る日本人にとって実に美しい印象をあたえる.

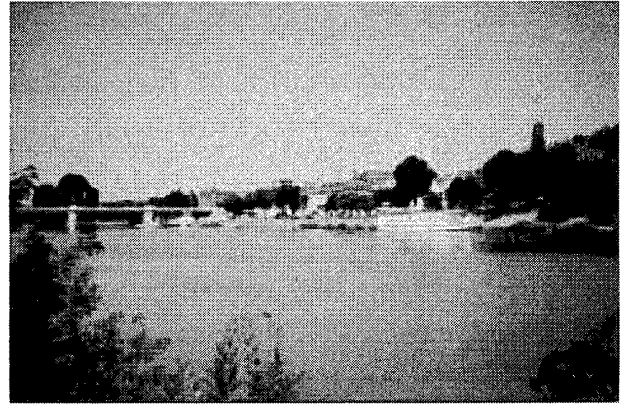


図6 ネッカー河 (ハイデルベルク)

- 23) 『日本人の精神風土』, 54頁.
- 24) 『日本人の精神風土』, 63頁.
- 25) 『日本人の精神風土』, 65頁.
- 26) 『日本人の精神風土』, 65頁.